

チェンマイ ゴルフツアー

～700年の歴史息づく北の都を訪ねて～

田中 成美 著



KSN ゴルフクラブ&国際交流クラブ
合同企画

1 チェンマイ到着

桜も散り始めた3月31日、福岡空港を午後5時頃に出た私達一行が、韓国の仁川空港を経て目指すチェンマイに到着したのは、深夜の11時過ぎであった。

仁川空港からは約5時間のフライトで、海外旅行としてはそう長くはないフライトだったが、そこはシニアを中心とするメンバーだけに、それぞれに疲労の色が伺えた。

そもそも今回の「ゴルフ ツアー」企画は、私が「スクールの春休みには、チェンマイにゴルフをしに行こう！」と思ったのが切掛けであった。

なぜチェンマイなのか？

それは、リタイアしてからチェンマイにロングステイしている方と、たまたまお知り合いになり、その方からチェンマイについての色々な話を伺ったことがあって以来、いつもの「好奇心の虫」が騒ぎ出してどうしても納まらなかったからに他ならない。

それにしても、今回のグループは私を含めて10人という大人数！ いつもは一人旅か2～4人ぐらいの少人数の旅行しかしない私にとっては異例のことである。

生来、色々な気遣いが不得意で、ややもすると「わがまま虫」が騒ぎ出し、人の面倒を見るところではなくなる私は、このような大人数の海外旅行のお世話なんて到底できないのである。それなのに、ちょっとしたことで旅行情報が流布してしまい、気付いた時には大グループになってしまっていた。

しかしながら、参加者の皆様は日頃から「熊本シニアネット」を通して親しくしていただいている方達ばかりで、「ミルクさん（私のニックネーム）、よろしくお願

します！！」と旅への期待に目を輝かせて言われると、「旅は道連れ」、「ゴールデンエイジを一層輝かせるためのお役に立とう、そして自分も楽しめる旅にしよう！」との大それた気持ちが沸き起こり、今日の日を迎えたのだった。

何はともあれ、3月31日の深夜に無事にチェンマイ空港に到着した。

手荷物受取所では、色とりどりのキャディバッグやら大きなスーツケースが流れて来ている。その一つ一つに一人一人の夢が詰まっている様に思えて、微笑ましい。

「ヨイショ！！」と、私も自分の重いキャディバッグをコンベアーから下ろそうとした。そしたら、どこからか逞しい男性の腕が伸びて来て、無言で抱えて下ろしてくれた。

有り難さとともに、「日本男性もここまで進歩したか」と感心して見上げると、そこにはいつものKSN（熊本シニアネット）のSさんの顔があった。



仁山空港で乗り換え

2. チェンマイ市街の様子

AGODA という予約サイトをご存知だろうか？

アジア系のホテルに俄然強い予約サイトである。これを通して取った3つ星ホテルは、価格の割には良かったと思う。

古い城壁近くの静かな環境にあり、部屋も広く、窓からはナイトビューが一望できた。価格は一泊約1800円（食事なし）だから、考えるとすごい安さで、この物価の安さもチェンマイの大きな魅力のひとつと言える。予約については、最近ではホテルに直接予約するより、インターネットの予約サイトを使った方がグンと安くなり、ちょっと不思議な話である。私達が泊まったこのホテルも、もしも直接予約すると一泊2700円ぐらいになるらしい。

ところで、タイのホテルはイギリスの影響が濃く見られ、1階が「Ground」と呼ばれ、2階が1階となっている。また、サービスに支払うチップ制もイギリスと全く同じで、かつての欧米列強の激しい侵略を防ぎながら、近代化に邁進した時代の名残とも言えそうだ。この心理は、日本も明治の開国時に経験してるので、よく理解できる。

それはさておき、同室のCさんもチェンマイ第一夜はよく眠れたそうで、表情も爽やかで何よりだった。外国での早朝散歩は大きな楽しみのひとつであるので、さっそく二人でホテル近辺の散策に出かけた。

通りに出ると、古い城壁の一部とその周りを囲むお堀が目飛び込んで来た。

これはかつてタイの北部を治めたランナー・タイ王朝の城跡であるらしい。チェンマイはこの王国の首都として栄えていたようだ。今でもタイ北部では最大規模の都市で、お堀に沿って走る道路は交通量が多く、忙しく車が行き交っている。走っている車の殆どは日本車で、それだけでもタイが日本の重要な貿易相手国なのだと分かる。

実際、タイに取って日本は貿易額・投資額ともに第一位だそうで、日本側に取ってもそれだけ重要なお客様の国だと言える。

しかし車は庶民にとってはまだ高嶺の花らしく、バイクが主流のようで、実にたくさんさんのバイクが、負けじとばかりのスピードを出して走っている

そのほかにトラックを改造して作られた乗合自動車ソンテイ、また三輪車を改造したミニタクシーとも言えるトゥクトゥクもたくさん走っている。

大通りの様子の写真を取りながら歩いていると、向こうからヨーロッパ系の観光客が歩いて来た。チェンマイはヨーロッパから非常にたくさんさんの観光客が来ているのに驚く。その反面日本人はほとんど見かけないのも不思議であったが、どうもシーズンオフであるらしい。12月から2月位までがタイのベストシーズンで、その頃は約3000人がロングステイをしているらしい！

話は戻るが、向こうから歩いて来ていたヨーロッパ系の男性観光客は、私達女性二人に気付くと、狭い通路の横側にサッと身をよけて、私達が通り過ぎるのを待っていてくれた。

「Thank you.」とお礼を言うとニッコリと微笑みが帰ってきた。さすが、ヨーロッパ人はレディファーストが染み込んでいるらしく、感心してしまった瞬間だ

った。



チェンマイはバイクが多い



ソンティとトゥクトゥク

二人でそのまま歩いていると、子供と若い母親達が数人いる建物の前に来た。

入口の前で子供と話していた若い母親が私達に気付いて、英語で話しかけてきた。

「Where are you from ?」(どこから来たの?)

から始まって、簡単英語だったが一生懸命に英語で話しかけてくる。ヨーロッパからたくさん観光客が来ている土地柄だから、英語への関心、需要も大いに違くない。

母親がその建物の敷地に案内してくれて、色々説明してくれるが、タイ語でまったくわからない。困ったことに、その母親の英語はまだ学習段階にあるようで、その建物がいったい何なのか全然分からずじまいだった。

もちろん今だに分からない。(笑)



私達に話しかけてきたタイ人の親子

3. タイの象は働き者

楽しい早朝散歩で好調な滑り出しをしたチェンマイ初日、午前中は「エレファントキャンプ」を訪れた。

像達の水浴び、サッカーキックやお絵描きに歓声を上げ、そして象に乗ったりして楽しんだ。ここでも観光客はヨーロッパ系が殆どで、日本人は誰ひとり見かけなかったのは不思議であった。

ここは「メーサー エレファントキャンプ」と言う所で、1976年に5頭の象で始めたそうだ。それが今では70頭に増えているそうである。世界で初めてのエレファントキャンプはここだったそうで、ISOも取得し、タイの優秀キャンプ賞にも輝いている。

そもそも、このタイで飼育されている象は、本来は森で材木の運搬を担う重要な役割があって重用されてきたのだそうだ。歴代王朝も国旗に象の絵をあしらっている事からも分かるように、人間の暮らしに大いに役立った象の地位は高かったと言える。

しかし、タイでも林業の衰退が進み、当然ながら象達の材木運搬の仕事も無くなった。そこで失業した象達の再雇用と言えるのが、この「エレファントキャンプ」なのだそうだ。

超満員の国際色豊かな観光客が、象のサッカーボールのキックを見て大歓声をあげたり、細かいタッチで鼻で絵を書く姿に感心したりしているのを見ると、象の失業対策は大成功だったようだ

また象達も、自分の将来のために必死で新技術を学んだのか、見事なボールキック、素晴らしい出来栄の絵の数々であった。

冗談はさておき、チェンマイがあるタイ北部には「クイー族」という古くから象とともに生きる少数民族が多く住んでいると言う。このエレファントキャンプでも、象の世話や調教をやっているのは「クイー族」だったのかもしれない。

ショーの後、およそ1時間の「象乗り」を体験したが、象の背中の上から、キャンプ地の所々に高床式の民家が見えた。

衣類などが干してあるので、そこに人が住んでいるのか、住み込みで象の世話をしているのか知りたいと思い、象の背中の上の象使いのお兄さんに尋ねてみた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・??」

やはり複雑な事となると英語が通じない。

でも言葉の代わりに、まだ若い素朴な顔で、はにかむ様な優しい笑顔が帰って来る。

それならば答えは想像に任せることにし、その分は言葉が通じない楽しみを味わうことにした。

象の歩みが刻むスローなリズムに身を任せ、目を閉じる。すると熱帯の木々を吹き渡る風が創り出す自然音が、耳に優しく届いてくる。

言葉でなく、感性で自然と対話する時間、これもまた旅の醍醐味と言えそうだ。



勢揃いした像達



像って頭いい！

4 ゴルフでの会話

今回の旅行の最大の目的は、やはり「ゴルフ」である。

私も入れての参加者 5 人は「熊本シニアネット」のゴルフクラブの仲間で、平均スコアは人により格段の差があるものの、Golf Lover (ゴルフラバー) というのが共通項なのだ。

今回の旅行では観光との兼ね合いも考えて、一日おきの 2 日間をゴルフの日と設定し、現地の旅行会社を通して既にコースも予約してあった。

国にもよるが、タイでは現地の旅行会社を通したほうが、ゴルフ料金も安くなる。

チェンマイにはたくさんのゴルフコースがあり、主なコースでも 13 ぐらいあり、

世界トーナメントが行われる名門コースもある。

私達が予約したのは、「チェンマイ ハイランド ゴルフ&リゾート」(5つ星)と「メジョー ゴルフクラブ&リゾート」(4つ星)であった。

気になる料金であるが、「ハイランド GR」が 2070 バーツ (約 6500 円、ホテル送迎、グリーンフィ、キャディフィ含む)、「メジョー GC」が 1970 バーツ (約 6,000 円、ホテル送迎、グリーンフィ、キャディフィ含む)。高級ゴルフコースとしては日本では考えられない安さと言える。

しかし、カートフィが 600 バーツ~700 バーツ (1800 円から~2200 円ぐらい) は別料金である。

私達もこの事は事前学習で押さえてはいたが、いつの間にか忘れていて、第一日目の「ハイランド GR」のフロントでは慌ててしまった。

「カートはお使いになられますか？代金はお一人 600 バーツ (約 1800 円) です」と尋ねられ、既に買い物等を通して、だいぶ通貨の感覚が身についていた各メンバーは、それを聞いてちょっとビックリした様子だった。

「エッ、そぎゃんすつと？ ならば、歩こうか？」

「いやいや、こぎゃん暑かて、とても歩いてなんかでけんて！」と言ったような会話が飛び交い、結局全員がカートを使うことになった。

今思うと、あんな5つ星クラスの高級ゴルフリゾートでプレイする時の会話ではなかった。(笑) 相手が日本語が解らないからいいものの、次回からはもっとスマートにいきたいものである。

日本のゴルフ場と違って、ロッカールームにはスタッフが立っていて、にこやかに

迎え入れて、バスタオルを手渡してくれる。

チェンマイの人達は、女性も男性も本当に良い笑顔をしている。そしていつもニコニコしている感じである。国民の94%が仏教徒であるそうだが、信仰心の厚さからその穏やかな心が生まれるのか、あるいは実り多い豊かな自然が人間を優しくするのか、いずれにしてもこちらまでニコリとしてしまうようなところがある。

それはさて置き、「ハイランド GR」のロッカールームはリゾートの雰囲気コーディネートされていて、シャワールーム、チェア、ミラーのデザインもなかなか素敵な雰囲気で、フラワーバス風に鮮やかな花を浮かべたハンドウオッシャーとかが置いてあり、ゴルフ後のシャワーも極めて快適であった。

そんな雰囲気の高級ゴルフリゾートでのプレイの最大の魅力は、何と言っても一人、一人につくキャディであると思う。

ボールの世話からティの設置、スコアカードの記録、クラブ選定、カートの運転・・・要するになんでもしてくれるのである。

最近ではキャディ無しのセルフプレイでゴルフをしている身にとっては、まるで女王様になった気分である。

ちょっと時間があれば扇子を取り出して風を送ってくれたり、写真を撮ってくれたり、グリーン上では、私の動きに合わせて傘をさしかけてついて来てくれるし、的確なラインを読んでくれてボールをきちんと合わせて置いてくれるのも、感心してしまう。

「それが仕事だよ」、「チップをはずんで欲しいからだよ」

と言ってしまうえばそれまでだが、ここは外国。

「お金を払ってサービスを買って、何もしないのがお客様である」との大前提に立った文化圏である。「郷に入っては郷に従え」で、その文化システムのもたらす豪華な香りを味わせていただいた。

さて、トロピカルなゴルフコースだけあって、ゴルフ場には至るところにフルーツの木が植えられていて、それぞれ時期に応じて豊かな実りをもたらすようだ。

キャディ達はちょっとした時間を見つけては、そのフルーツをちぎって皮をむいてお客様に食べさせてくれるのである。

ちょうどこの時期はマンゴーの時期だったらしく、まだ熟れていないマンゴーをよく取って食べさせてくれた。

タイではマンゴーは青いうちに食べるのも一般的なようで、ちょっと酸っぱいがほんのり甘く、天然塩をふりかけて供してくれたが、とても美味だった。きっと健康・美容にとっても良いに違いない。

ちょっと可笑しかったのは、キャディもお客様と一緒に食べることである。フルーツに限らず、お菓子やキャンディ等をいつもよく食べていて、時々はお客様にもくれる。

こういう点は、日本では考えられない。暑い炎天下での仕事の疲労を緩和するためだろうが、ユニークで面白い。

今回は女性プレーヤーは私一人ということで、キャディも親しみを持ったのか、自分の事を色々と話してくれることもあった。

それは、「メジャー GC」でプレイをしていた時であった。

私だけ赤のレディスティから打つので、男性4人が打ち終わるまでに時々けっこう

な待ち時間がある。あるホールでキャディと二人でカートに乗ったまま待っていた時のことである。私を扇子で扇いでくれているキャディにちょっと尋ねてみた。

私)「何年ぐらいキャディをしてるんですか？」

キャディ)「だいたい6年ぐらいです。私は家が貧しかったので11歳で学校を終え、姉の所で家政婦をしたりしてたんですが、6年前にキャディになりました。」

私)「そうだったんですか。日本人のお客様は多いですか？」

キャディ)「いいえ、ほとんどいないです。でも、韓国、台湾、香港からはたくさん来ますよ。」

私)「へー、そうなんですね。ヨーロッパからはどうですか？」

キャディ)「あまり、いません。でも、ひとりだけスコットランド人のお金持ちが、一人で毎週3回はプレイシに来られるんですよ。そしていつも、私をキャディに指名してくれるんです。」

私)「きっと、あなたが優秀だからなんでしょうね。」

キャディ)「はい、それもありますが、私が英語ができるからなんです。その人は退職されたシニアなんですけど、スコットランドの奥さんと離婚して、こっちで30歳ぐらい年下の若い奥さんと結婚されて、2歳の子供もいるんですよ。」

私)「それは、男の人達からするとずい分羨ましい話でしょうね。(笑)」

キャディ)「実は私も離婚してるんです。10歳の息子と72歳の母親と一緒に暮らしています。来週の月曜から、息子が『僧侶体験修行』で2週間いないんです。毎晩抱っこして寝てるのに、2週間もいないなんて寂しい！」

私)「それは寂しいですねー。その『僧侶体験修行』というのは、男の子は全員しな

いといけないんですか？」

キャディ)「いいえ、そういう訳ではないんですけど、多くの男の子が修行しますよ」

私)「とても良い教育になるんでしょうね。ところで、あなたも、そのスコットランド人のような、お金持ちの男性を見つけて再婚したら？ (笑い)」

キャディ) (笑いながら)「そのスコットランド人って、ギャンブル好きなんですよ。

私、そんな人嫌い！ (笑)」

と、いつの間にか話し込んでいたら、私の打つ番が回ってきた。このキャディさんと打ち解けたからか、久しぶりに豪快なティショットができた。



芝生の手入れも良い



雨が多いので、池も多い。池ポチャッにご用心！

5. 異文化圏ではご用心

チェンマイに着いて2回目のゴルフは「メジャー GC」だった。先にも書いた様に、キャディとの会話はタイ人の生活が垣間見えて、とても興味深かった。

しかしちょっと残念だったのは、キャディに対して時々セクハラまがいの言動をしていた男性参加者がチラホラいたことだった。

当のキャディ達は、もちろんお客様から何と言われても、何をされても、恥ずかしそうにニコニコするだけである。

ところが、私自身がちょっと不快感を感じてしまい、そこは日頃から外国人達に、「思っていること、感じたことは明確に伝えて欲しい」とお願いされているせいか、セーブが効かなかった。折しも、ボールがバンカーに入ったりして泣かされたホールの後だっただけに、不快感は頂点に達していた。(Oh, No !)

「人がボールを打つ時は、そんな事言わないで、静かにしてください！」

(“Be quiet when someone hits the ball. Don’ t say that kind of things !”)

と、超ストレート表現が出てしまった。

男性諸君は水を打ったように黙ってしまった。

「シマッタ！ヨカッタ！」と交錯した気持ちがよぎったが、後の祭りであった。

この事について、後でちょっと考えてみた。日本でもそうであるが、人は自分が接する外国人を通してその国を見ることが出来る。そんなセクハラ的な言動を受けて、このキャディ達は日本男性についてどんな印象を持つのだろうか、決して

「日本男性って、さすが紳士だなあ・・・」とは思わないだろう。

これがもし西洋諸国ならば、セクハラで訴えられても仕方のない言動と言える。そしてたんまりと損害賠償金を取られたりするから御用心である。

「タイではよかとたい、そぎゃん硬いことば言いなすな」

と言う声が聞こえてきそうである。

しかしながら、外国では日本人の考えが及ばないような事態が起こりうることは、頭の片隅に入れておいたほうが良いと思う。

例えば、「タイでは子供の頭を手でなでると、大変な侮辱になる」と言われる。日本では誉める行為が侮辱になる、それが外国である。

そういう事も踏まえて、セクハラ的な言動は慎むに限ると言うのが私の結論である。



涼しい風が吹き渡る茶小屋

6. スパ&マッサージ

私のひどいスコアも含め、そんな良い事と悪い事が混在した2回目のゴルフから帰った午後、思い切ってホテル近くの「スパ&マッサージ」に行くことにした。

このスパは「マッサージ スクール」に隣接していて、スクールの先生達が一般客にもマッサージを提供していた。

英語で書かれたパンフレットに目を通すと、1時間のフット等の部位別のマッサージから、2時間から3時間の色々なマッサージがセットになったコースもある。

他に特別な予定がないので、ゆっくりと2時間半のコースを取ることにした。

フットスパから始まって、アロマオイルの全身マッサージ、タイのハーブを使ったフェイストリートメント、そして最後はヘッドマッサージとなっている。それでも料金は1300バーツ（約4000円）だから、これもまた驚くべき安さである。

「マッサージの準備ができるまで15分くらいお待ちください」と、オーナーと思われる年配の女性が冷たいジュースを出してくれた。そのジュースをいただきながら、隣に座っていたヨーロッパ系の若い男性にちょっと話しかけてみた。

私)「マッサージをされたんですか？」

男性)「はい、僕は2日コースを取ってるんです」

私)「2日？そんなに長いマッサージもあるんですか！」

男性) (ニッコリしながら)「いいえ、スクールで2日間のレッスンを受けてるんです。ほら、ひとつ、ひとつのマッサージを取ると、とても高くなるでしょう。でも、2日間のスクールにすると、とても安くなるんです。講義の他に実習もあって、全てのマッサージも授業として受けれるんです」

私)「そうなんですかねー！でも、マッサージって、日本ではとても高いんですよ。ここでは安いですよ」

男性)「オランダもそうですよ。とても高いですよ。だから私も、ここでなるべくマッサージして帰ろうと思ってるんです」

(あー、この人はオランダ人なのか) と、その時分かった。

そんな話に夢中になっている間に、マッサージルームの準備ができて、案内された。カーテンを引いた隣のベッドからは、女性が英語で「痛い！アイタタタ・・・」と言っている声が聞こえてきて、急に不安になったが、もう既に衣服を全て脱いで薄い布一枚を掛けられた「まな板の上の鯉」である。覚悟するしかない。

あるマッサージの先生が来て、まずフットスパが始まった。

数種類のフルーツや野菜等が入ったお湯に足を15分つけておくことから始まった。

これはとても気持ち良かった。これだけで足の疲れが取れる気がした。

15分経つと静かにフットマッサージが始まった。

・・・なんと言う気持ち良さ・・・これぞこの世の天国か・・・

フットの後、全身オイルマッサージが始まったが、あまりの気持ち良さにもうその時は半分は眠っていたと思う。

ヘッドマッサージが終わって2時間半のマッサージが終わった時は、まだ30分しか経ってないと感じたほどだった。

先ほどの女性はなぜ痛がってたのだろう？

やはり個人差があるので、何でも体験してみないと分からないということか。

おかげで、身も軽く、頭も軽くなって、ホテルへの帰り道の夜のネオンが一層華やいで輝いて見えた。



スパ&マッサージの待合室



マッサージ台が並ぶ

8. 終わりに

何か新幹線に乗った様な、超高速の短いチェンマイ訪問の旅であった。

それでも、食に関してはトムヤンクンを始め、殆どのタイ料理を食べる事ができたし、観光地に関しては、エレファントキャンプ、ドイ・ステープ寺院、山岳民族村（メオ族）訪問、カントークディナー、ゴールドトラライアングル、メーサイ、チェンライ、ナイトバザール、などなど代表的なものは全て網羅することができた。おまけに個人的には、同室のCさんとのヘアカット、ビン川クルーズ（農家レストラン訪問もした）、ホテルのプールでスイミング・・・等と、自分なりの色つけもできた旅行であった。

特にヘアカットに行った美容院は、オーナー美容師が「チェンマイ美容師コンテスト」で優勝した経験もあり、タイ女王のヘアも担当したことのある、言わばカリスマ美容師で、二人とも大満足のヘアカットとなった。帰国してからも、夫を始め多くの方が誉めてくれるので、改めてその美容師の技術に感心しているところである。

今振り返ると、あれもこれもと内容濃い旅を実現することができた。この旅の実現に一方ならぬお世話になったのは、仕事関係で現地で3年間滞在の経験がえられるTさん御夫妻であった。この御夫妻の御尽力なくしては、今回のような内容ギッシリの旅は実現できなかつたであろう。

心より感謝する次第である。

そして、この上なく笑い、食べ、お酒もいただき、おしゃべりして、この上ない愉快的な旅にしてくれたのは、やはり楽しいシニアネットの参加者の一人一人であった。

みなさん、本当にありがとう！

コップンカー！！



全員揃って元気に帰国



Wonderful time in Chiang Mai